

小さな友達

浅野 宇泰

「いてっ」

鉄棒から声が聞こえた。変だなと思つて鉄棒に向かつて耳をすませてみると、また声が聞こえた。

「どこ見てるんだよ、こっちだよ」

今度は鉄棒からではなく、自分の手から声が聞

こえた。手のひらを見ると、指の付け根それぞれにいくつかの小さな顔があった。

「やっと気づいた」

「今日も逆上がりするの？」

「いたいのやだなあ」

小さな顔たちと目が合うと、それぞれが思い思いの言葉を発し始めた。それらは昨日まで手のひらに出来ていた『まめ』だった。

「でも、逆上がり出来るようにならないと、仲間はずれになっちゃうんだ」

僕は手のひらのまめに話しかけた。

「いいじゃん、ほら、ボクたちも友達だよ」

「むこうでお話しよう？」

「おなかへったなあ」

僕はまめたちと友達になった。誰もいないところ

ろでたくさんのお話をした。けれど、ある日の体育の時間の後、小指の付け根のまめが一つつぶれてしまっていた。

「頑張った証拠だよ」

「あともう少しで出来るようになるね」

もう少しで逆上がりが出来そうな時だった。周りの同級生の子たちにも「あと少し」と声援が届くようになったその時。手のひらを見ると、つい

に顔のあるまめが一つだけになってしまった。

「きつと明日には出来るようになるよ！」

その日の夜も、最後に残ったまめとたくさんお話をした。

「逆上がりが出来たら次は何に挑戦する？」

「うーんとね、次は……たくさん友達が作れるように頑張ることかな！」

「じゃあ、ボクとお話ししてるみたいにな、いっばいお話してみるといいと思う！」

小さな手のひらをみて思いだす。今は無き友達の声で、たくさんの人たちと仲良くなれたこと。かすかな寝息を立てるその手のひらは少しだけまめが出来ていた。自分が昔出会った友達の顔を、今度は息子の手のひらに描いてあげた。

筆まめな猫

堀畑 潤羽

県外から長崎の大学に進学して少し経った頃。月に一度、手紙を届けてくれる不思議な猫が現れるようになった。

差出人は書いていないので分からないけれど、毎月猫が家の前に来て手紙をくれる。

最初は母かと思った。けれど母は滅多なことでは手紙を書かない。よく手紙を書き年賀状などもせつせと出していた父は、私が十五歳の時に病気で他界してしまった。

七月の手紙には、「そろそろ期末試験のある頃と思います。大学の勉強は難しいでしょうが、くれぐれも単位を落とさないように」なんて書いてあり、しつかり私の成績が怪しいことを見抜いて

いた。一月は寒中見舞いが、四月には進級を祝う手紙が届いた。

未だに差出人は分からずにいるけれど、なんだか温かい気持ちになれるので私はこの一年半、手紙を貰い続けている。

ただ一つ気になるのは、去年も今年も八月だけ猫が現れなかったこと。その他の月は欠かさず来てくれるのにどうしてだろう。

大学二年の一月、私は「二十歳のつどい」に参加するため実家に帰省した。

家に着くなり、母はこんなことを言った。

「あなたに渡したいものがあるの。ちよつと不思議な手紙なんだけど」

どきつとした。母のところにもあの猫が来ているのかな。

「去年と一昨年のお盆にね、お父さんに会ったの。

これだけ渡してほしいって頼まれて……。何が不思議かってね、お父さん、猫の耳と尻尾を生やしてたんだよ」

可笑しそうに母は言い、私に二通の封筒を渡してくれた。

お父さんが？　もしかして……

私ははっとして、急いで中の手紙を見た。その筆跡は、猫が毎月届けてくれる手紙と同じだった。

母は笑う。けれど私は、父の字を涙で滲ませてしまおう。

あの猫は、お父さんの手紙を届けてくれていたんだ。

「ニャー」

子猫の鳴き声が聞こえる。今日は月に一度の手紙の日。